



LAOS UPDATE

>>>09 2015 | Vol. 13

法律人材育成強化プロジェクト～最高人民検察院25周年記念メダルと感謝状授与



法律人材育成強化プロジェクト・フェーズ2(フェーズ1: 2010年7月から2014年7月、フェーズ2: 2014年7月から2018年7月)の専門家である石岡専門家、川村専門家、棚橋専門家に対し、最高人民検察院から長年に渡るプロジェクト活動の実績と貢献を評価して最高人民検察院25周年メダルと感謝状が授

与されました。本プロジェクトでは、フェーズ1に引き続き司法省職員、裁判官、検察官、大学教授をはじめラオスの司法関係者とともに民法典の起草、法曹養成、法令普及や理解促進の改善など多岐に渡りラオスの方々と寄り添いながら丁寧に活動を進めており、ラオス司法関係者からも活動に対し高い評価を得ています。2015年9月にはブンクート司法大臣が日本を訪れ、日本の法務省、最高裁判所やJICA本部関係者と意見交換・協議を行い今後のさらなる協力・

友好関係の深化及びラオスにおける法律人材育成への貢献が期待されています。

京都市とビエンチャン市がMOU締結

9月7日、京都市と首都ビエンチャン市が「首都ビエンチャン市における市民協働型廃棄物有効利用システム構築支援事業」(草の根技術協力事業)に関するMOUを締結しました。この事業では、首都ビエンチャン市のパイロット地区において、廃棄物処理に関する市民の正しい知識の習得による市民協働型の資源有効利用を行うため、廃棄物管理のシステム構築を支援します。

現在ラオスではゴミの分別に関する政府の指針がなく、集められた廃棄物は分別することなく埋め立てられます。

事業の中で京都市及び公益財団法人地球環境センターは、自身の知見を活かし、ビエンチャン市の廃棄物の分別収集・再資源化についての方針策定、更にレストラン協会等と協力しながら、大口排出者の協力体制を構築していきます。

京都市とビエンチャン市は今後パートナーシップ協定を結び、更なる友好関係を深めていくことが期待されます。



(左)署名式の様子が複数の紙面で紹介されました。

(上)署名式にて握手をする京都市環境政策課長とビエンチャン市副市長

>>>News Update

ウドムサイ日本文化祭り報告



ウドムサイ日本文化祭り実行委員長 阿部 貴弘

(青年海外協力隊 サッカー教育/ウドムサイ県)

8月15日(土)にウドムサイ県にて、ウドムサイ日本文化祭りを開催しました。当初は、ウドムサイ県の青年海外協力隊(以下JOCV)が実行委員として中心で企画・準備を進めてのスタートでした。その後、日本大使館との共催事業として、青年海外協力隊派遣50周年、日本・ラオス外交関係樹立60周年の記念行事として格上げされました。協賛団体には、ウドムサイ県情報文化観光局、教育スポーツ局、JICA、ラオス国立大学ラオス日本センター、銀行、ホテル、カフェ、民間会社、ラオスOV会など多くの団体より御支援・御協賛を賜りました。当日は晴天にも恵まれて500名を超える来場者にお越しいただき、ラオスと日本の文化を楽しんでいただきました。



ステージで、国歌斉唱から始まり、招待者のスピーチ、ラオスの歌、ダンス、踊りの披露・紹介、日本の歌、文化紹介、日本の医療とサポートで娘の命が助かったソムロット一家の御紹介、浴衣着付け体験、書道体験、折紙体験、けん玉体験、巻寿司体験、日本食・御菓子・調味料の販売、日本文化紹介の展示物、掲示物、冊子の無料配布など盛り沢山のプログラムを実施することが出来ました。

当日は、トラブルの連続でしたが、臨機応変に動いてくれたボランティアスタッフのJOCV、職場同僚のラオ人に助けられて、招待者、来場者も笑顔で、無事に終了することが出来ました。祭後は、参加者から「餅つきが、楽しかった」、「手巻き寿司が、美味しかった」、「浴衣着て、嬉しかった」と感想を戴き、主催者冥利につきました。諸々、行き届かなかった部分も多々あったかと思いますが、地方都市でこの規模の日本文化祭りをラオスで実施したのは初めてだったと大使館の広報文化班長である二元さまからは労いの御言葉を頂戴しました。多くの方々の御協力、御支援がなければ、このイベントは成り立ちませんでした。関係者皆さまに深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

「JICAファミリーデー」が開催されました！

8月19日、夏休みの子供向けイベントとしてJICAで働くお父さんお母さんの職場の様子を見学する「JICAファミリーデー」がJICA本部で開催されました。そのプログラムの一部としてラオス事務所はTV会議システムを通じクイズやラオスの踊り「ランボン」を紹介しました。企画準備の段階からラオス人職員が中心となって行い、当日のMCは日本留学経験のある職員2名が担当しました。TV画面を通じて少しでもラオスの様子が伝わるよう、参加したスタッフはラオ族とモン族の民族衣装を身に着けたり、観光地のポスターを張り雰囲気作りに努めました。



100人以上の子ども達が参加し、子ども達からは「ラオス語を勉強できてよかった!」「ラオスの踊りを教えてもらって楽しかった!」などたくさんの感想が寄せられました。

教師海外研修(JICA沖縄、JICA中国)報告

今年は7月末～8月中旬にかけ、2国内センター(JICA中国、JICA沖縄)からの教師海外研修がラオスで実施されました。教師海外研修は、現役の教員を対象に、開発途上国の現状と日本との関係を学び、研修後に勤務先の学校にて開発教育を行い日本の子ども達に還元していくことを目的に、毎年実施されています。

沖縄県から参加した6名の教員は、ルアンパバーン、ウドムサイ、ビエンチャン市と北部を中心に視察し、ラオスと沖縄の共通する文化、歴史、生活習慣等を参加教員それぞれの視点から探りました。

中国地方4県から参加した教員8名は、「ラオスの子ども達を取り巻く現状と課題」をテーマに、南部を中心とした教育関連プロジェクト、青年海外協力隊、また郡病院を訪問し様々なセクターを通し現状を学びました。



～新人OJT研修生紹介～

4月に新卒採用でJICAに入構しラオス事務所でOJT研修中の宮康貴と申します。

学生時代は、東北の震災復興のボランティアでの活動を続け気仙沼に仮設の復興商店街の立ち上げから助力していました。このボランティア経験を通して、途上国が日本を支援している実態やその背景に日本がODAを実施してきたということがあると知りました。こうした経験からJICAを志望し、現在ラオス事務所で勤務しています。

今回ラオスに来たのは初めてですが、学生時代ボランティアをしていたカンボジアと似ているところや異なるところが見えてきたので、新たに国を見るときの「ラオスのものさし」を手に入れて帰国できればと思っています。



同期の宮とラオス事務所で研修中の平林由梨恵と申します。

小さいころに教科書に載っていたアフリカの子供達の写真を見て、世界には自分とは全く異なる環境で苦しい思いをしながら生活をしている人達がいることを知り、この業界を志しました。大学では土木分野を学び、その中でも都市と交通分野で研究を行ってきました。一人でも多くの人を笑顔にする、そして国際協力に携わる方々を結び活躍する場を作っていくJICA職員を目指し、日々奮闘中です。

途上国での長期滞在、一人暮らしともに初めての私にとっては、日々の生活から全てが学びです。国際協力の現場やJICAでできることを学ぶとともに、「ラオスという国を見る目」をつけて日本に帰ろうと思います。



おことわり: 本ニュースレターは、JICAラオスの活動内容及びニュースの共有を目的とし、約3ヶ月に1度を目処に発刊しています。ご意見・ご質問は事務所総務・広報班までお願いします。(担当: 木村、前納)